

大熊町における 農業イノベーション



黒田敦史

大熊インキュベーションセンター（OIC） インキュベーションマネージャー

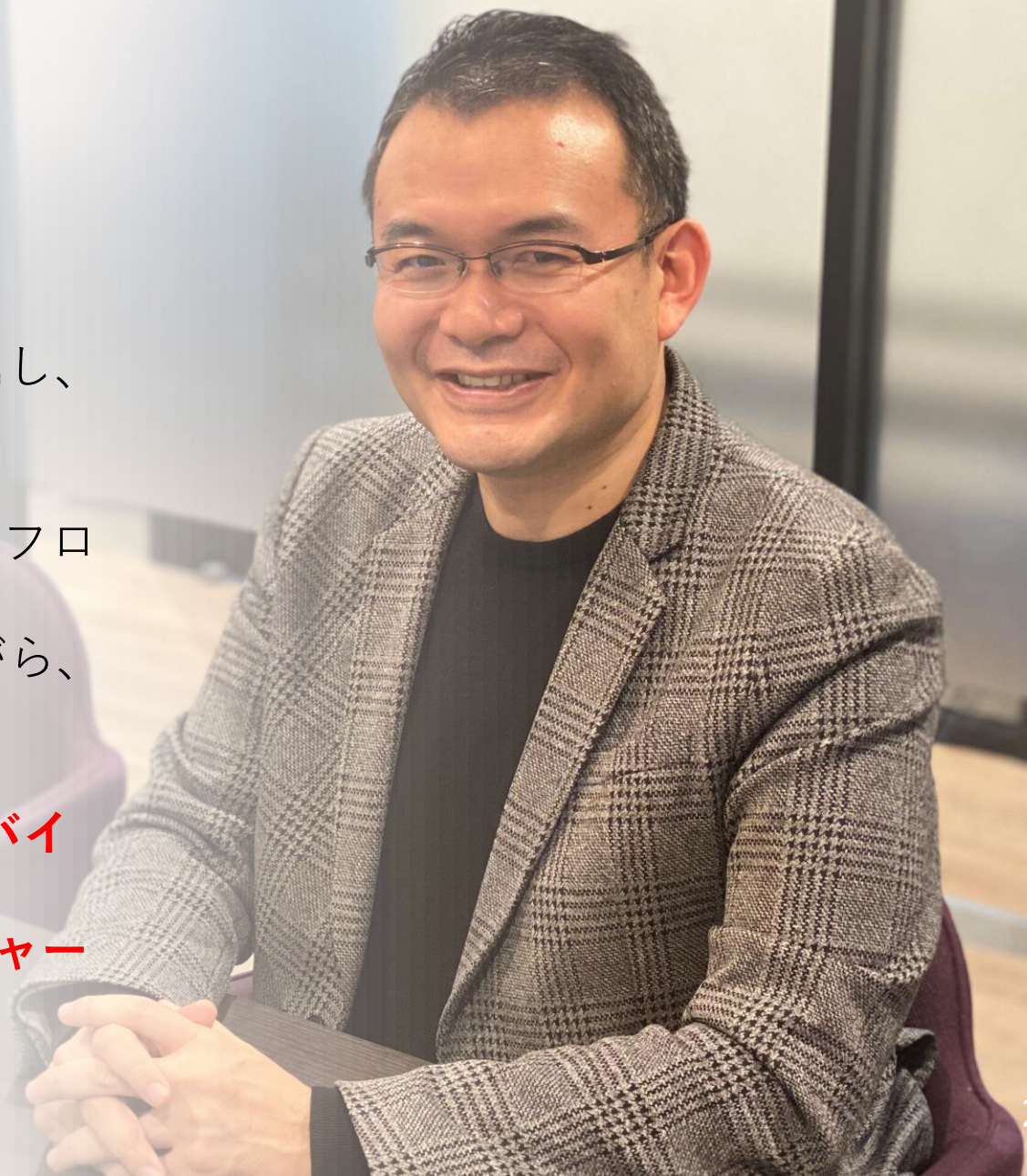
京都大学経済学部出身。在学時は、アメフト部に所属し、二度の日本一を達成。

1998年に大学卒業後、パナソニック、A.T.カーニー、フロンティアマネジメントを経て2013年に独立・起業。起業後は、大企業の新規事業の立ち上げ支援をしながら、6社のスタートアップに経営参画している。

2020年より、大熊町の産業創出・まちづくりのアドバイザーとして参画。

2022年7月より、OICのインキュベーションマネージャーに就任。

2023年7月に、大熊町に移住。



大熊町の過去・現在・未来

大熊町の位置・面積

福島県の沿岸部にあり、震災前には11,000人以上が居住

福島県



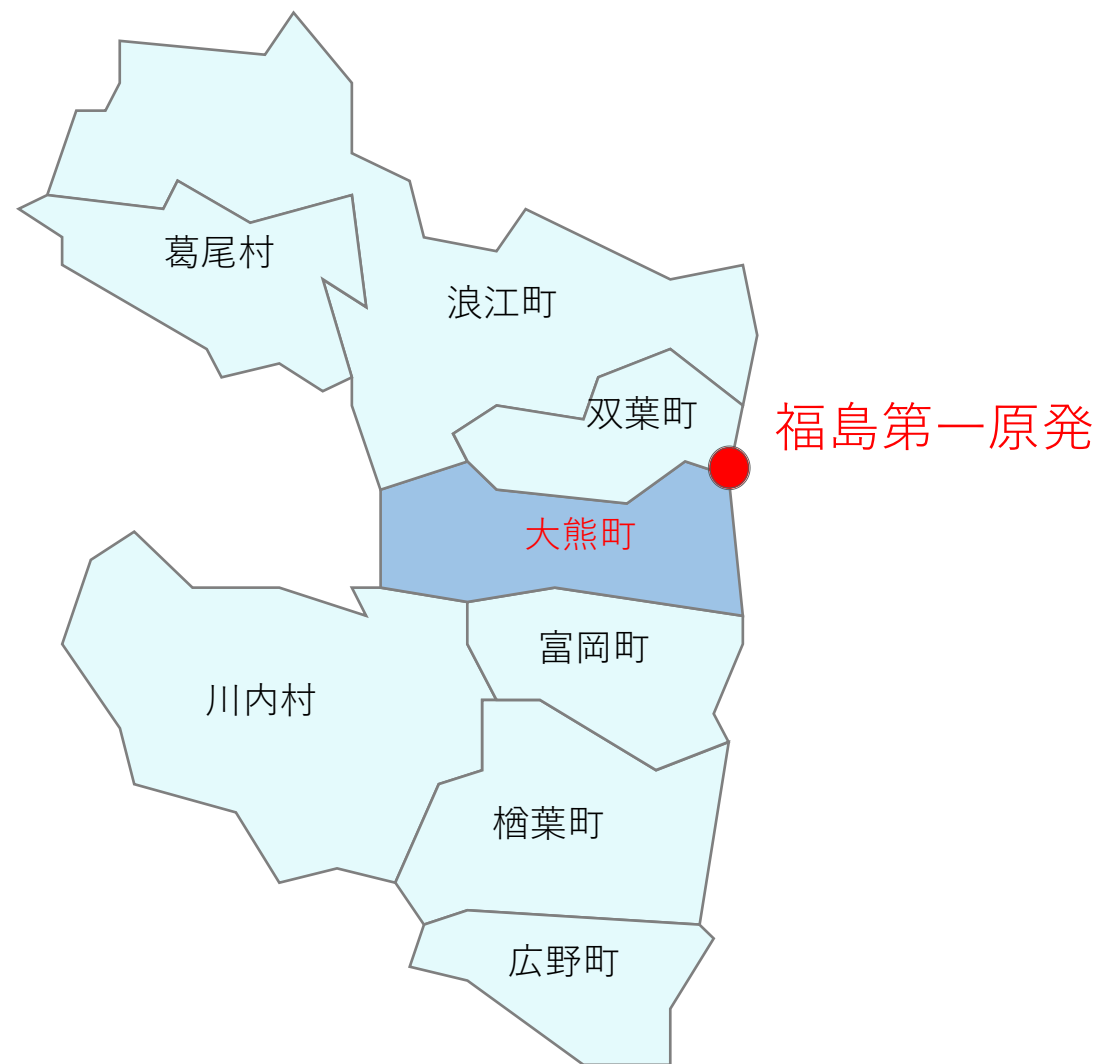
太平洋

■ 人口11,505人
(2011年3月11日時点)

■ 面積78.7km²

震災前の大熊町の主要産業

大熊町は福島第一原発がある町



震災後の原発事故

東北大震災の津波の影響により2011年3月12日に水素爆発が発生



原発事故発生後の避難

原発事故後の放射線の拡散の影響により、全町民が避難



震災直後の避難状況

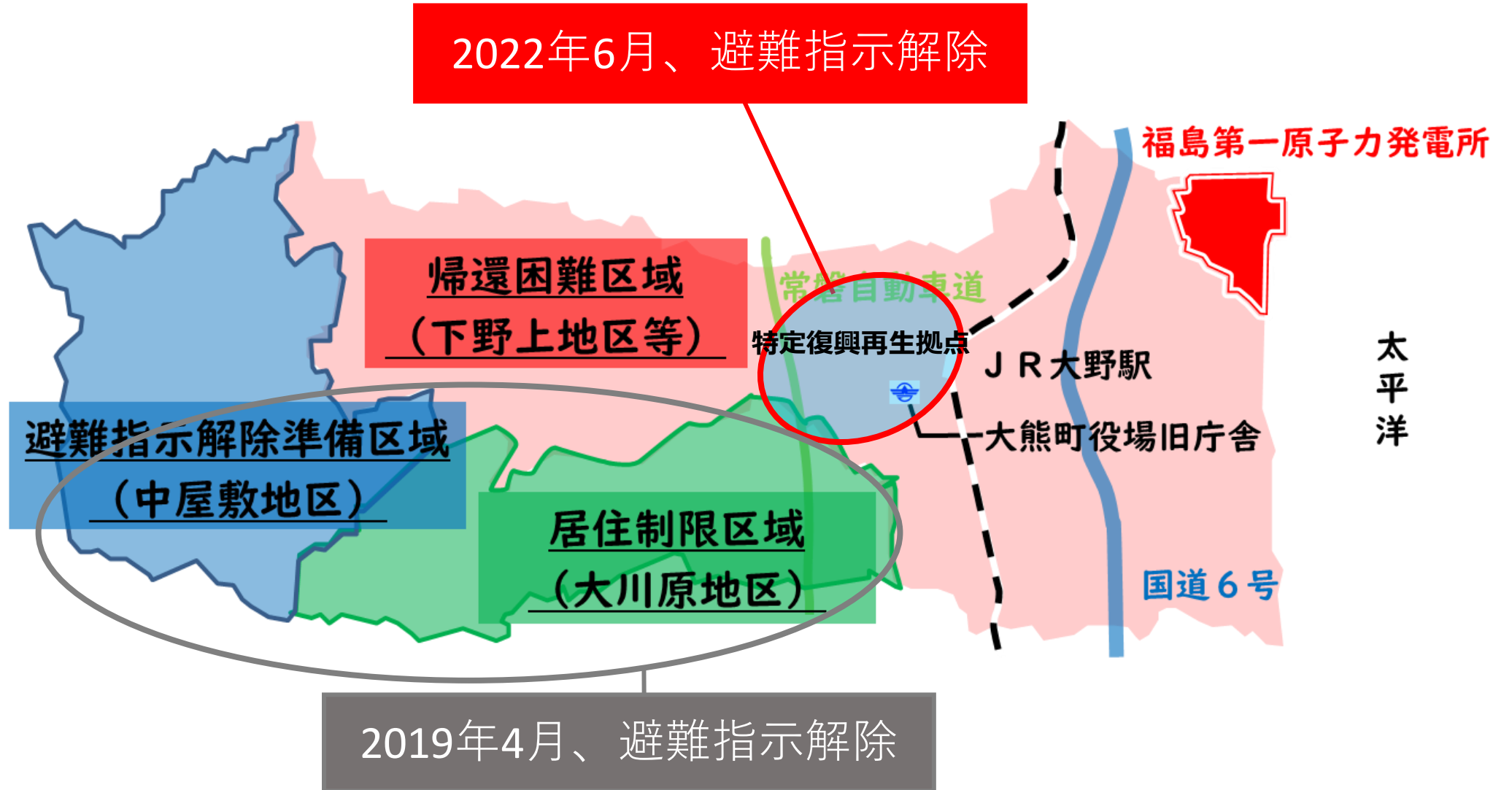
避難指示解除前の大熊町

避難後、約8年間は、町への立ち入りが制限され、誰も住めない街に。



今後の本格的な復興

2022年6月に町の主要地域の下野上の一部地域の避難指示が解除



現在の大川原地区

役場を移設し、公営住宅、商業施設、宿泊施設等を相次いで建設



復興地の今後の姿 ①産業交流施設／商業施設

2025年3月、産業交流施設（オフィスビル）と商業施設が駅前にオープン

産業交流施設 『CREVAおおくま』

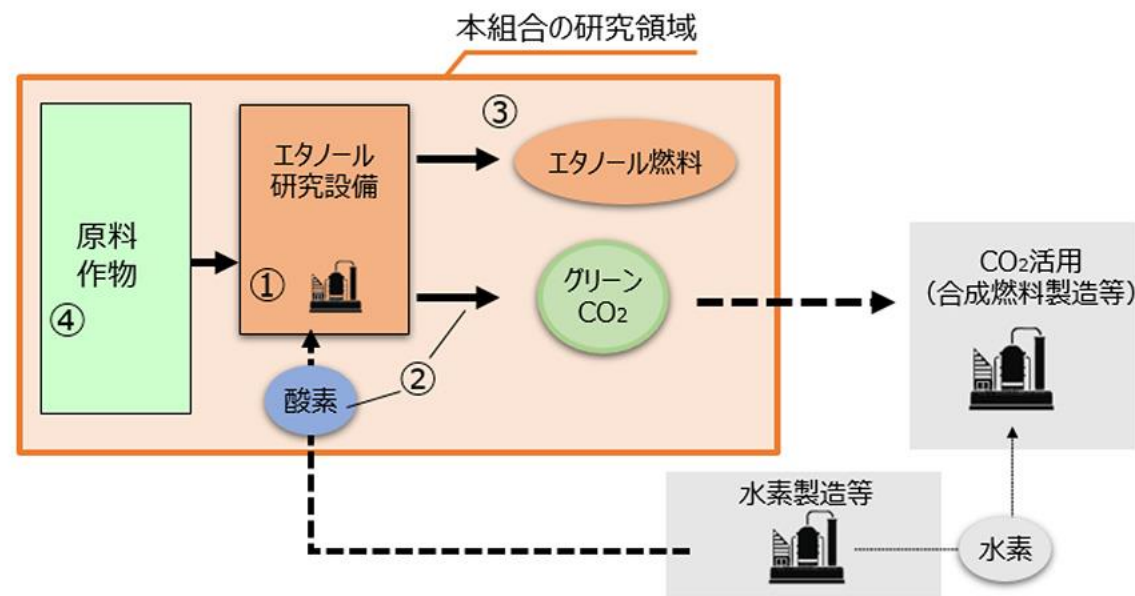


商業施設 『クマSUNテラス』



復興地の今後の姿 ②西工業団地

2024年10月頃の竣工予定で、バイオエタノールの生産研究設備を建設中



- トヨタ自動車、ENEOS、スズキ、SUBARU、ダイハツ工業、豊田通商、マツダの7社が参画する「次世代グリーンCO2燃料技術研究組合」が自動車用バイオエタノール燃料を製造する技術研究施設

復興地の今後の姿 ③教育施設「学び舎 ゆめの森」

2023年4月に、12年ぶりに幼保小中一貫校として学校も再開

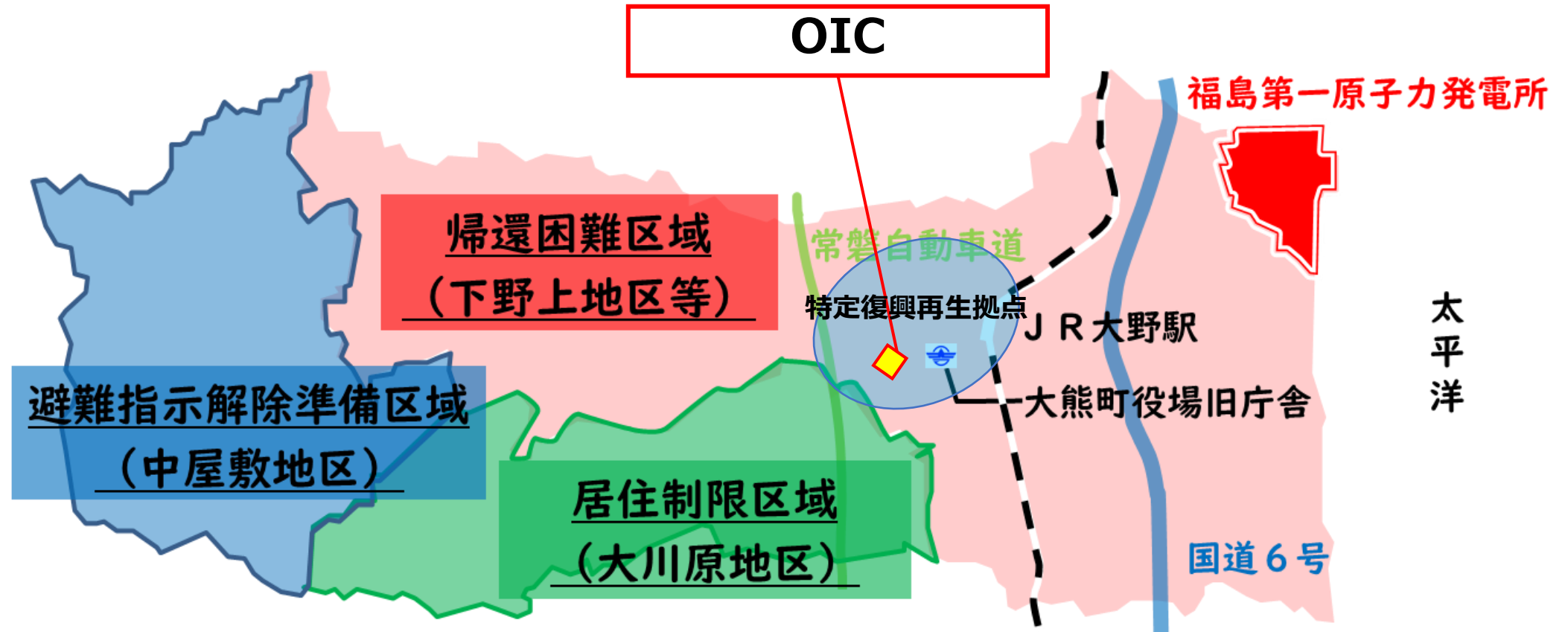


- ・ 保育園・幼稚園・小学校・中学校が一体となり、0～15歳が一緒になって学びを深められる場所

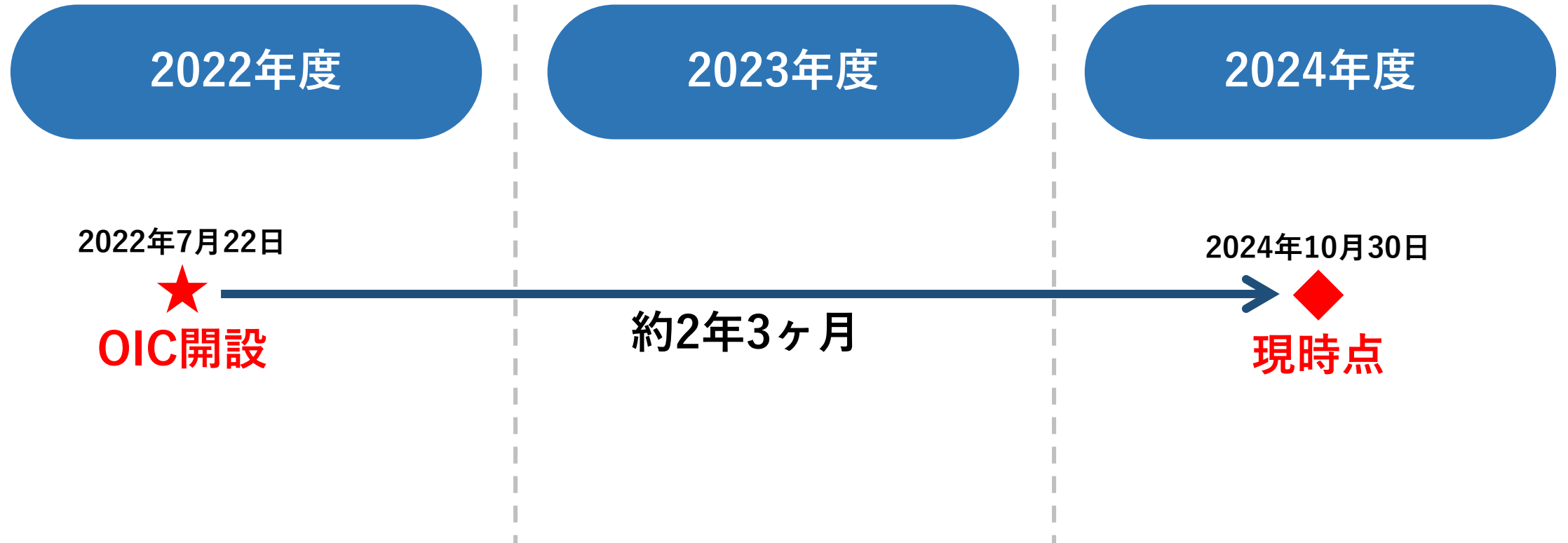
大熊インキュベーションセンター (OIC) の施設概要、取り組み

大熊インキュベーションセンター（OIC）の開設

2022年6月に避難指示解除になった復興拠点の中に、7月22日にOICを開設



開設から現在まで



大熊インキュベーションセンターの外観

廃校になった旧大野小学校をインキュベーションセンターに改装



施設の概要



基幹産業の卵の
発掘と育成

大熊町の復興
に貢献

町の課題解決や
賑わい作りに貢献す
るサービスの育成

当センターの特徴

快適・便利なワークスペース

手厚いサポート

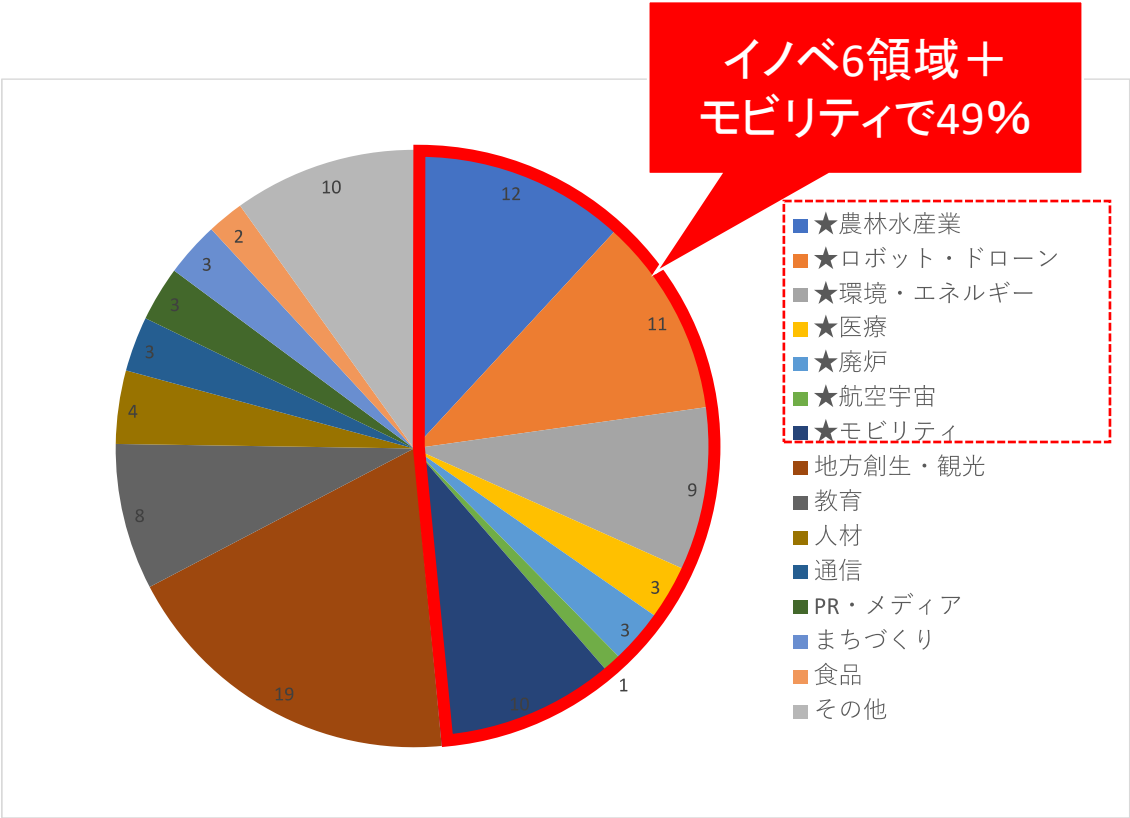
町との密接な連携

入居者 150団体 ※2024年10月時点

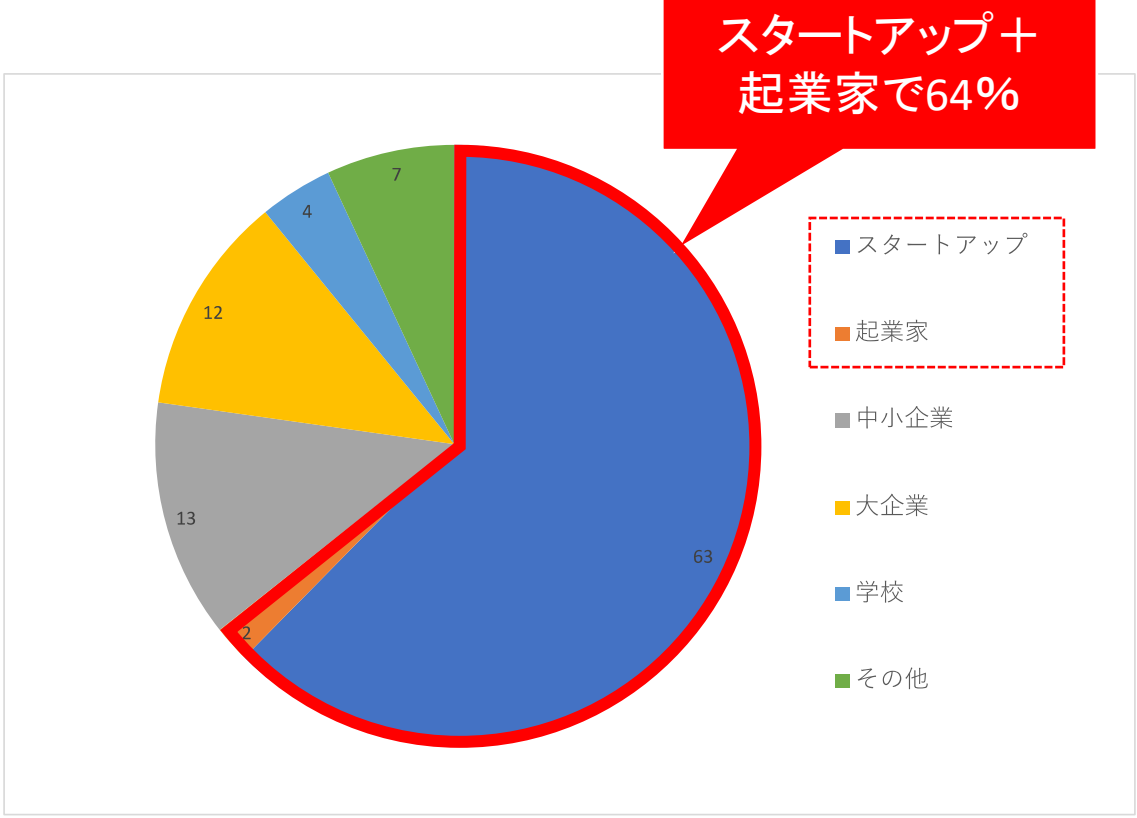


現在（2023年10月時点）の入居者の内訳

事業領域別



企業分類別



実証プロジェクトの実施数

開設時の目標

現時点の実績

(達成率)

実施
プロジェクト数

開設から3年間で

60案件



開設から2年間で

50案件

(83%)

大熊町での実証事例①無人コンビニシステム

人が少なく、お店もほとんどない町で、低コスト型の無人販売サービスを実証

大熊町が抱える課題

- 町内にお店や飲食店がほとんどない
- お店で働く人がいない

画像認識AIによる無人コンビニ (入居企業名：株式会社AIBOD)



- 独自の画像認識AIによる商品の認識から決済まで無人でできる
- 低コストのため、人が少ない過疎地域でも導入できる

大熊町での実証事例②電動EVシェアリング

交通手段が少ない町で、電動EVのシェアリングサービスを実証

大熊町が抱える課題

- 町外からの来訪者が町内を移動する手段がない



電動三輪バイクによるシェアモビリティサービス (入居企業名：FUTURE株式会社)



- 独自に開発した電動三輪バイクを使用
- 町の3ヶ所に電動三輪バイクを常置し、好きな場所で借りて、好きな場所に返却できる

大熊町での農業復興の取り組み

震災前の大熊町の農業

温暖な気候で、かつては梨やキウイの果樹栽培が盛ん

梨の収穫（震災前）



大熊町の農業における課題

- ①担い手不足と高齢化
- ②農地の管理と集約化
- ③風評被害と市場ニーズの確保
- ④新たな営農スタイルと技術導入の必要性
- ⑤地域復興との連携

大熊町の営農再開の方向性

大熊町の営農再開目標

次世代に向けて、新しい大熊の“環境循環型営農スタイル”を目指す

大熊町の営農再開の具体的施策

- ① 担い手の確保と育成
- ② 農地管理と集約化の推進
- ③ 環境循環型農業の推進（植物工場等）
- ④ 新たな栽培品目（非食用の農作物）の導入
- ⑤ 特産品開発や6次化事業の推進
- ⑥ 風評被害への対応と安全性確保

会社概要



株式会社ReFruits

福島第一原発のある大熊町で、一度は失われた
キウイ栽培、果樹産業の再生に取り組む会社です

1

大熊の果樹産業



町内のフルーツの売上
震災前
2.9 億円
現在(2023年)
0

「フルーツの香るロマンの里」を掲げる大熊町
全町避難で果樹産業は消失

2

長年キウイを指導していて、一つの目標を持った。
いつの日か大熊町のキウイの売り上げを1億円にしたい。
一年の売り上げ1億に成れば、立派な特産と言えるだろう。

目標まであと一步のところ、追い出された。2度と帰れない。
無念。残念。

-フルーツガーデン関本 関本好一さんの手記より

3

創業の経緯



▲フルーツガーデン関本 関本元樹さん(中央)と創業メンバー



▲大熊キウイ再生クラブとして収穫した町内産キウイ

大熊で100年続いた果樹農家のキウイに感動
地元住民らと作る任意団体でキウイ栽培を開始

4

本格的なキウイ栽培



栽培開始に向けた様々なハードル
3月に苗を植え付け、2ヶ月で2m弱成長するものも

5

町との協働

大熊町とも連携し、大熊のキウイの価値を広げるため全国的なイベントともコラボを進める



△昨年度の優勝高校生(宮城県泉館山高校)と、日本を代表する江森宏之シェフとのコラボスイーツ

7

研究開発

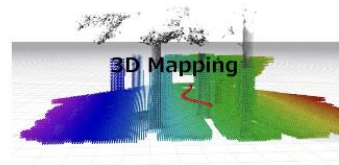
ドローン

落合陽一PM担当プロジェクト

機械学習に基づく中山間地域向け農業用散布ドローン群

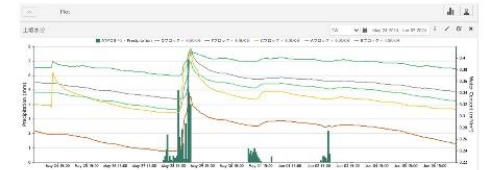
採択者

有田 朋樹
和田 唯我



6

データ収集



畑の様子



▲ 地域住民や子ども達、地元サッカーチームなど多くの人が畑を訪れる

8

花から出来たカクテル Enju

花酵母を用いた新感覚カクテルブランド

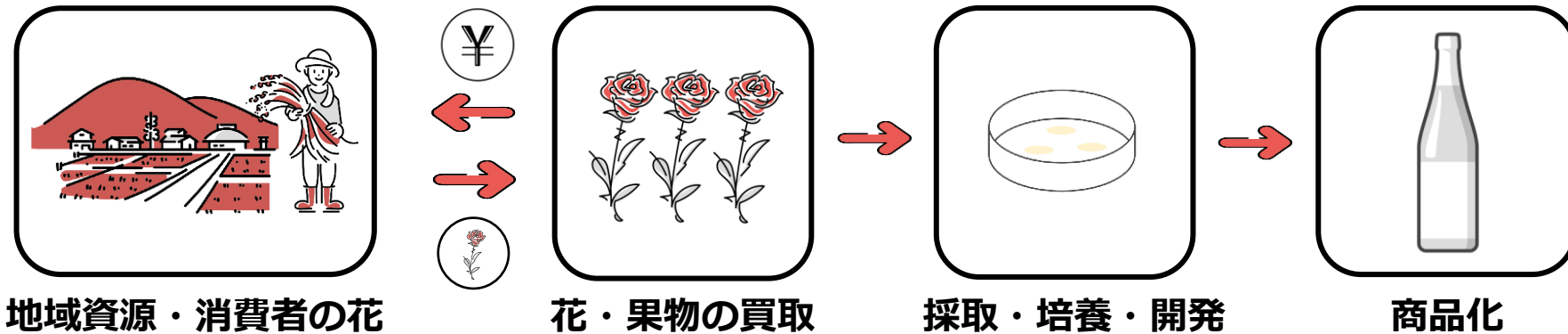


活動について

花酵母は地域にあるそこでしか採れない花をお酒にすることが可能

- ⇒ 何十年何百年と地域に根ざして生きてきた花を新たな地域資源として捉え直し、活用する
- ⇒ 抽出確率は1/100,000,000の確率であり、弊社は高確率で抽出技術を持つ

Ichidoのお酒事業



- ⇒ 地域にある様々な資源をふんだんに使用し、そこでしか作れない商品を創る

※花酵母の採取：花の終わりかけの時期に採取するのが成功率が高く、シーズン終わりの廃棄花(フラワーロス)の削減へ貢献可能

核となる花酵母（技術）を持ち、地域性を強く再構築させる



ロスフラワーをしっかり買取。花農家の新たな収益源を生み出し地域産業を活性化させる
花を鑑賞用だけではない新たな花の売り方を、県内外また世界へ発信

農・食・滞在の複合施設「FUN EAT MAKERS in Okuma」

～アグリテックとユニバーサルワークフローで福島県大熊町の震災復興への貢献をめざす～

株式会社コネクトアラウンド（クリーク・アンド・リバー社のアグリ分野の子会社）の事業



「FUN EAT MAKERS in Okuma」とは

さまざまな人が農業に関わり（つくる）、美味しくて体によい食（たべる）を通じて、たくさんの方が大熊町とつながる（であう）場所です。これを実現するべく、「高付加価値農業生産エリア」「食を楽しむエリア」「様々なプロフェッショナルがつながるワーケーション滞在エリア」の3つのエリアで構成する建物と、「大熊町と様々な人がつながる」半屋外エリアと「大熊町の自然の景色とつながる」屋外エリアの5つで構成されています。

大熊町は“日本一チャレンジしやすい町”

大熊町の“環境循環型営農スタイル”にチャレンジしたい方のご提案をお待ちしています！